■ グンゼ創業者　波多野鶴吉と妻はなの生涯を綴った『妍蟲記』■

【要　約　版】

グンゼ創業者の波多野鶴吉と妻はなの人生をドラマチックに描いた小説に『妍蟲記』（けんちゅうき）があります。大河小説「徳川家康」で知られる山岡壮八によるものです。昭和２５年に出版され、グンゼ株式会社が創業１１０周年を機に社内教育資料として復刻したものを以下のとおり要約しました。

妍蟲記【無明　悪縁】

畑野鶴之介が京都烏丸四条下ルに貸本屋を開き、自らは「啓蒙方程式」という代数の手ほどきの本を書いたが、世間ではさっぱりで、寄贈した仲間や塾生などからも何ら反響が無かった。暑さで苛立っているところへ小僧の友吉が「お絹が、兵庫屋に逃げ込んだ」と知らせてきた。お絹とは鶴之介を虜にした女で、兵庫屋とは表は呉服屋を営みながら博奕のテラ銭を扱い、時代を小敏く生きる街の顔ききだ。鶴之介はお絹を取り戻そうと兵庫屋に乗り込む。お絹を返してくれと執拗に迫る鶴之介に「あんたは二十歳やそこらで塾を開いた立派なお人や！お絹は風に任せて流れゆく女なんや」と離縁を諭すのだった。

妍蟲記【髪を吹く風】

鶴之介の故郷は京都の丹波、何鹿（いかるが）郡。元禄の頃から栄えてきた綾部藩大庄屋の葉室家の次男として生まれた。９歳の時、母の生家の分家にあたる畑野の家の養子になった。その後、京都に遊学していた鶴之介はある日突然帰省し１５歳のお八重と婚礼をすませた。婚礼は金を捻出するためのものだった。畑野家は鶴之介の作った借財の整理を担うことに。残った金を持ち逃げし、追っ手に捕まったら「やり始めた勉強がある」とだまし続ける始末。

妍蟲記【刑罰】

借金に加え鶴之介にはさらに過酷な現実が待ち受けていた。性病を患ったのである。絶望した鶴之介のもとに丹波に残した妻お八重からの手紙が届く。そこには「親戚が鶴之介と離縁するように迫っている。売り払った納屋に一人で住んでいて、帰りを待っている。誰がどのように悪く言おうとも八重は兄さんの味方」としたためられていた。

妍蟲記【大地の鳴る夜】

八重は、なよやかな眉と優しい眼、慎ましくしまった口元が、不思議な可憐さで心に残る娘だった。寝床に伏せていた八重の耳にゴソゴソと何かを動かす気配が届く。「どなた？」と問うと「私だよ」と聞きなれない声。八重はそっと戸を開いた。戸の隙からサッと月の光が射して、「ああ兄さん」。しかし次の言葉にお八重は絶句した。「近寄るとお前の体がけがれる」「私はな、死のうと思ったのや。しかし私が死んだだけでは済まぬことが１つあるのに気付いたのや」その言葉を聞き、八重は全身を固くして泣き濡れるのだった。

妍蟲記【月の下・露を断つ】

延村葉室家の当主は鶴之介の兄、嘉右衛門、妻はお民という。納屋には作男や下女が住んでいる。お民が戸締りに廻っているとき、庭木戸で怪しくもつれる人影を見た。手拭で頬かむりをした鶴之介と、その体にまつわりついて離れぬお八重だった。この場を逃れようとする鶴之介をお八重は離さない。お民は、あの小娘に、あのような情熱で男一人を押し切る力があったのかと思った。昔気質の父は、腰に一刀をひっ提げて鶴之介の前に立ちはだかっているのだった。「その顔を兄にも嫁にも見せてやるがよい。養家を潰した放蕩のあとが、その態じゃ」父はすらりと刀を抜いた。お八重が叫ぶ。「兄さんは死ぬ気でいたのを私が連れてきたのです」切らせるものかと言う激しい女の本能が髪まで逆立てている感じであった。よろよろと父はよろけて、カチリと庭の石を斬った。

妍蟲記【嫂の心・嫂（あね）兄嫁のこと】

お八重が、鶴之介と一緒に葉室家に引き取られて２カ月余りが過ぎた。ある日、才気縦横の嫂お民は「男だったら立派に世間を見返すだけの勇気がいります。私は鶴之介さんをうんと辛い眼に遭わせてやろうと思っている…」とお八重に逆療法を提案し始めた。「学校の先生にするんですよ。大人は陰口しか利きませんが、子どもなら先生に向かって言うでしょう。そのたびに鶴之介さんは鋼の鞭をあてられます。そうして慣らさなければ、あの人は一生人の前へ出るのを嫌う偏屈になります」。そのように学校の先生になることを勧めたのだ。

妍蟲記【苦業の道】

鶴之介の無視する姿に、八重も笑いを忘れてすくんでいた。それでも、お八重は傍目ほど不幸ではなかった。一緒に住んで３カ月余の深夜、ふと気づくと右手があったかい。鶴之介の掌に包まれているのであった。鶴之介は泣いていた。「許してくれー」と呟く声が耳に入った。お八重は「鶴之介がそばにいる…」それだけで満足でき、鶴之介の善意を疑う事の出来ない女であった。やがて４月が来て、鶴之介は小学校に通うことになる。始業式の日から「鼻のない先生」の綽名が生まれた。先生になって３日目、自分の受け持つのは４年生２６人、生徒の年齢はまちまちで赤子を背負った娘もいた。鶴之介は名簿を開き、１６人目に「佐伯絹子」と大きく呼び上げてハッとし、名簿を見直した。佐伯ではなく佐久だった。娘の顔がお絹に見えたのだ。

妍蟲記【内に描く・よろこび】

７月中頃の暑い日だった。教室で「絹子」を呼んだ。「学校は眠りに来るところではない。１時間目からどうした」。だが２時間目も絹子は眠った。３時間目も４時間目も…鶴之助は、終業の鐘を待ちわびて佐久の家を訪問したのだった。佐久家は小川の向こうの一角にあった。むっとした悪臭が立ち込めている。中には白い繭がうずたかく積んである。その中で４５・６歳の女が一人繭のケバをむしっていた。「人手が足りねえもんで。養蚕期は寝ずの戦いやで」絹子の家庭の有様を目の当たりにして鶴之介は立ちすくんだ。そこへ繭の仲買人が入ってくる。仲買人と母親のやり取りは、丹波の繭が買い叩かれる養蚕農家の厳しい姿を映し出していた。

妍蟲記【壁の影】

今まで無関係で生きてきた「社会」というものの実体が鶴之介の心を締め上げる。仲買人は貧しい百姓を苦しめ、貧しい百姓はその娘を苦しめる…その負の連鎖は何処かで断たなければならない。鶴之介はその歯車を幸福の歯車に変えなければーと壁を見つめたときハタと気づいた。お八重がじっと鶴之介を見ていたのだ。「九つの時から眼も心も私から離さずに…そのおかげで私は生きていたのでは？」鬱屈していた胸の霧が、素早い速度で肉体を離れていくのを感じた。鶴之介の転機であった。一方でお八重も、少しでも他人の喜ぶように努めることが、自分の喜びに通じることを悟っていくのだった。

妍蟲記【粗の魁なるもの】

他を喜ばせられないものはこの世から滅びてゆく…そうした宇宙の姿が素直に鶴之介の心に沁み込んでいく。翌日から養蚕の勉強が始まる。哀れな農民の味方になって、絹で社会を正してやろうと考えた。ある日の新聞に大きな見出しが躍った。『三丹地方の生糸は日本一！』。ただし日本一でも、それは下からの一番。京都府産の生糸は「粗の魁なるもの」須らく府民を蹶起して、この不名誉を挽回すべしーとあった。

妍蟲記【燃えざる者】

鶴之介夫婦が綿畑に桑を植えると、村人たちは笑い出した。「鼻のないサンに蚕が飼えりゃ、うしろの禿山ハナだらけ」と学校では歌になった。その頃、京都にもう一人蚕や生糸の将来を熱心に考え奔走した人物がいた。京都府知事の北垣国造だ。知事が製糸家を集めて蚕糸業革新のために、会議を開くと聞いて鶴之介は胸をおどらせた。知事は再生の第一歩として郡単位の組合を作り、業者が拠金し共同作業の対処を求めた。組合というものの性格を鶴之介は知り、そこには相互扶助の心がありさえすれば大きな社会改革の利益になると感じた。

妍蟲記【同志を求める】

田中敬造と言う人物がいる。通称山繭と呼ばれる天蚕の研究をしている。天蚕は屋外で飼う。天蚕の飼料は桑ではなく、クヌギであった。田中は天蚕の特徴を次々にあげて、この地方に輝くものとなると話す。鶴之介が協力の話をすると「貴方は家蚕をおやりなさい。私は天蚕でやってみます」加えて言った「志を同じくする者が手を取ってやることも大切ですが、二人とも失敗したのでは百姓は救われません」思わず鶴之介は田中を見直した。「仲買人はどうすれば安く買えるか血眼になって百姓を叩きます。百姓には憤怒があり、貧しい子女の涙がある。」「そこで私は一番高く繭を買うためには、世界一の生糸…繭ではありません生糸を作るより道はないと言う答えにぶつかるのです」と田中は語った。鶴之介は「西洋社会の働くものと経営者との衝突をそのまま持ち込んではならない。工女さんは株主の娘さん、会社は利益専一に働くよりは人を喜ばすために働く。人を喜ばすためには、喜ばせるだけの教養が必要ですから、学校にして工場、工場にして学校と言う組織でやってみたい」と応えた。

妍蟲記【構想】

田中との面会を終え帰宅した鶴之介はお八重に言う。「私は世界一の生糸を作って誰よりも高くこの辺の百姓の繭を買いつける。その仕事一つを成し遂げるために、私は生まれてきた」それを聞いたお八重も「出来ます。旦那様なら」と力強く励ますのだった。鶴之介は描いてきた会社の成り立ちを話し始めた。まず、第 1 期（準備研究時代）は、桑樹改良と夫婦での養蚕の実践。同時に信州などの先進地に技術者を派遣し蚕種と製糸を学ばせる。３年の研修を終え彼らが帰省すると同時に試験工場を建設する。次に第２期（外廓啓蒙時代）は、試験工場で良質な生糸を生産し、養蚕家、蚕種家、製糸家と連携して組合を形成する。そして、第３期（創業時代）は、新会社「国是製糸」を創設。営業部の上に教育部を置き、貧農子女を抱擁して世界一の生糸生産を行うーというのだ。鶴之介と八重は涙を流しながら輝かしい未来を確信したのだった。

妍蟲記【創業】

鶴之介夫婦が養蚕に手を染めて８年。綾部市郊外の由良川のほとりに近代的設備を備えた製糸工場が操業を始めた。工女は約１千人。株式会社で資本金は９万８千円だった。この工場を包む空気は他とは違った不思議なものを感じさせた。その一つは株主。この会社の株主は、９割８分まで画１株、２株の貧しい養蚕家だったこと。二つ目には、社長自らが草履履きで集金に当たったこと。ここの社長はいつもモンペ姿で、夫婦して工場の長屋に住み、給料は専務や支配人よりはるかに安かった。三つ目は、工場内に事務所よりはるかに立派な寄宿舎が建てられ、貧しい株主の娘たちに教育を施したこと。四つ目には、繭買いの方法。社長曰く「養蚕家は大切な株主。少しでも高く買うことを考えよ。桑畑を改良させ、養蚕の要領を教えたりして、会社でつくる良い種を使うことを勧めよ」と語りかけた。他人を喜ばせようと努力する人を他人が嫌う筈はなかった。こうして彼の仕事は成功していくのであった。

妍蟲記【豪雨・狂う濁流】

四尾山の辺りに湧き出した真っ黒な雷雲。やがて、猛烈な雷鳴が頭上で裂けた。小石を叩きつけるような雨が降り出した。３０分経っても雨脚は衰えず見る間に道も小堀も濁水の激流に変わりだした。国是製糸の構内はその頃、凄まじい人と濁流の戦場になっていた。綾部一帯の半鐘は、狂ったように鳴り響いている。構内は、どろりとした濁水でいっぱいだった。浸水して来る濁水の中で、倉庫の繭を二階へと移している。「みんなの会社なのや！みんな手伝って！」闘いは夜明けまで続いた。夜が明けてみると一人の例外もなく泥んこだった。ぬらさずに済んだ繭は三分の一にも足りない。庭はいっぱいに繭を混ぜた足の踏み場もない泥の海だった。事務所で兄、嘉右衛門と鶴之介は悲壮な表情で向き合っていた。「葉室家も銀行も一緒に捨ててこの工場を助けてください。工場のうしろにある何鹿郡の百姓を助けてください」長い沈黙の後、嘉右衛門は「わしは、いつもお前におもちゃにされる…」と云った。こうして羽室家は、すべてを国是製絲のために捧げた。しかし、この出来事によって国是への信頼はぐっと深まり、人の和と信頼でこの工場の基礎がようやく固まった。

妍蟲記【第二の波】

国是製糸が受けた第二の大波は、明治３７年戦後の後の不況であった。形は、洪水の場合と同じ金融面からの突風で、郡下に小製糸家を持つ福知山銀行の取り付けから始まった。支配人の小倉は清算人に呼び出されて福知山へ行ってきた。戻ってきた彼は「銀行は安田善次郎の手に渡ることになりました」と告げた。一部からは鬼と呼ばれ、一部からは金の神とも称された安田は、精密冷酷な金融資本の投資測定器だった。彼とは正反対の理想に生き理想に死のうとする畑野鶴之介を安田が裁く位置に立ったのだった。「借入金は４０万円余りになっています。担保の繭と生糸全部でも半額にもなりません。ここで清算を強いられたら国是製糸は終わりです」小倉は叫んだ。

妍蟲記【鬼の魂】

ついに安田善次郎は綾部へやってきた。彼の眼はやはり国是製糸への過大な貸し出しに光っていた。彼が、紋付き袴の和服姿で国是製糸の門をくぐったとき、畑野鶴之介は、山布子に尻切れ草履で会社の庭につつじを植えていた。それは破産宣告を告げられる人間の姿ではなく、真剣な建設者の横顔であった。安田は畑野の姿に目を留め、彼のそばに寄ってきた。鶴之介は、顔をあげた。何の感情も見せない平静さで「安田さんじゃありませんか」といい、初めてにこりとし、両手の土を払って慇懃に頭を下げた。狭い応接室で再び顔を合わせ、「前期の決算書をご覧になって分かる通り、私は相当の教育費を支出しております。それをあなたは消耗費とお考えになりますか、資産とお考えになりますか？」。安田は「銀行家に教育の価値まで記帳しろとおっしゃるのですね」と応えた。「帳簿に書き込まれていない資産を貴方様がどれだけに見積もってくださるか。私はそれを楽しみにしていました」と鶴之介はつづけた。工場から倉庫、寄宿舎、社員長屋と見て廻った安田善次郎は、「畑野さん。私は冷酷な人間ですよ。よく鬼といわれる。その鬼の金をこれからは使ってください」と申し出た。「安田さん。さすがにあなたはご立派です」鶴之介は応えた。

妍蟲記【明治４２年】

畑野鶴之介の苦闘は続いた。いや、それは彼にとっては苦闘ではなくて、妻のお八重とともに喜びの道であった。良くはげみよく歩いた。その苦労を反映して国是の生糸は年々その品質を高めていった。そして、時は明治４２年。世界にインディアン印の繻子で信用を博しているスキンナー商会の経営者、ウイリアム・スキンナー氏は、しきりに日本への旅心をそそられていた。スキンナー氏は近頃になって驚くべき美しい糸に出会った。それは丸の中に「国是―」のマークの付いた日本から来る生糸であった。「日本に魔法使いが現れたぞ！」スキンナー氏は叫んだ。

妍蟲記【魔法の鍵】

国是製糸会社は、綾部のまちはずれの由良川のほとりにあった。スキンナー氏の眼に映った国是製糸は何の変哲もない平凡な一つの工場だった。門を入るとひどく小柄な、年齢のわからない労働者が一人、庭を掃いていた。労働者はひどく丁寧に頭を下げて彼と通訳の二人を応接室に案内した。応接室で待っていると古ぼけたフロックを着て、妙な鼻の上に今にも滑り落ちそうな老眼鏡を乗せた人が入ってきた。通訳があわてて耳元でささやいた。「さっきの労働者が社長だっ

たのです」。「えっ？」とスキンナー氏は額に深いしわを刻んだ。工場見学が始まった。工具が整頓され床も清潔な工場を見たあと別の建物に入った。寄宿舎らしいが、それにしては工場より建物が立派であり、中に入ると黒板や机がある。「これは寄宿舎として建てたものですか？それとも学校として建てたものですか？」とスキンナー氏がきくと、鶴之介は「表から見れば工場、裏から見れば学校だとみんな言います」。さらに鶴之介は、郡是で働く工女は株主である養蚕家の娘がほとんどであり、教育する責任があること。将来それが、良い繭として会社にも恩恵をもたらしてくれることを順序立ててスキンナー氏に説明した。スキンナー氏は、さらに尋ねた「良い糸を作る秘訣も伺いたい」。「秘密などありません」。鶴之介は「ただ、作る娘によって光沢が違うことを発見しましたので、いよいよ教育に力を入れてきただけです」。良い糸を作れるのは「心の清い、人を信ずることのできる娘です」と続けた。スキンナー氏はその場を立ち去り難かった。「最上の人格に、最善の勤労を…」講堂に張り出された標語を彼は呟いていた。

蚜蟲記【海を越えて】

鶴之介は、自分の生糸が海を越えて、アメリカまで認められたことに豊かな喜びを感じ、その喜びを株主たちとも分かちあおうと考えていた。一方、スキンナー氏は工場やそこで働く工女の姿、それらすべてに驚きと感動を覚えて呆然と立ちすくんでいた。「あなたは偉大な芸術家だ！」「私の幸福な絹の縦糸がどうして出来たかを知ってこんな嬉しいことは無い。私はあなたの工場でできるだけの糸を全部頂きたい！」。スキンナー氏は慌ててポケットからドル入れを取り出し「私は、日本の金をこれだけしか用意して来なかった。これだけをあなたの大切な株主のお嬢さんたちに捧げよう！私の最初に見せてもらった地上でもっとも美しい工場の働き手のために」と、鶴之介の手に５百円と８銭が渡された。鶴之介は、彼の志が、太平洋を越えて、一人の共感者を得たことに抑えがたい感動を誘われて胸が詰まった。彼は深々とスキンナー氏に頭を垂れた。